

は、院内広報誌や〈語りの会〉チームの輪を広げることによって、糖尿病関連疾患や視聴覚障害の患者へのアプローチを心がけているが、参加を得ることがなかなか難しいのが現状である。

2 聴き手の留意点

ライフストーリーとは

われわれが求めるライフストーリーは、個人が歩んできた人生を自らの言葉で語り、過去から現在に意味を与えるものである。しかし、そこには記憶違い・曖昧さ・嘘・ごまかしが存在し、自分にとって都合の良い事柄を選択して語ることがある。そのギャップを埋めるためにもできるだけ真の語りが生まれるよう、客観性を失うことなく共同して物語を紡ぎだす信頼関係の築けた聴き手の存在が欠かせない¹⁴⁾。

信頼関係の築けた聴き手の存在

解釈的対応は慎む

基本的にインタビューは、「これまでの人生で、あなたが経験されたことをお話しただけませんか」¹⁵⁾との問いで始められ、「あなたのお話は……と考えてもよろしいでしょうか」といった解釈的対応は慎むようにしている。

これは、「インタビューは筋立ての展開を伴う対人間的ドラマでもある」(ホルスタイン)¹⁶⁾ともいわれるように、インタビューで語られる内容は、聴き手の質問いかんによってどのようにでも展開し、語りの進行につれ語られる情報の視点も変わってくるからである。

3 語りの解釈と資料のフィードバック

収録資料の再読

語りは必ず解釈を伴うが¹⁷⁾、自らの人生を語るうちに新たな意味が閃くことはあっても、語りのなかで何を伝えようとしているか、どのような意味を与えようとしているか、語りの場で解釈を加えることは不可能に近い。よって語りの意味を理解するには収録資料の再読による検討が欠かせない。たとえ苦役であっても医療関係者が一度でも書き起こし作業を経験することは、患者の語りの追体験に繋がりその後の診療に有益だと考えている。

フィードバック

さらに、収録 DVD と書き起こした二次資料を語り手に提示し、確認作業もさることながらフィードバックすることは、患者がそれぞれの人生の意味を改めて問い直す手立てになると推察する。しかしその際、われわれ医療従

【用語解説】

●書き起こし²¹⁾

語りを文字化するには書き起こし作業が必要である。映像・音声の記録が一次資料とすれば、書き起こし記録は二次資料といえる。本来は聴き手が逐語的に書き起こしをすることが原則である

が、その作業は苦役に等しく、他者（書き起こし専門家）に依頼することが多い。書き起こしの場合では、通常、語りの要約・修正・削除・内容の入れ替えといった作行為が行われることによって筋立てが変わることがある。